

奈良史跡文化研究室を訪れてから二日が経とうとしている。何事も無く平穏な日常が過ぎて行く。

僕はそういうのが嫌いではない。人によつては、変化があつたりちよつとしたスリリングを期待するような日常を好むこともあるだろう

僕は案外、保守的な性格で昔から変化を好まない。この性格が自分自身を面白くなくしているのかも知れない

しかし、『タントウ、ミシタ・キョウコ』からの手紙やメールマガジンの一件から、僕の周りで何か動き出しているようだった。

毎朝の通勤電車では、相変わらず彼女と会釈するにとどめている。まだ、僕が手紙に気付いていない振りをしているのだが、彼女はどう思っているのやら。

でも、僕にも作戦というものがある。つまり、彼女と会つて話をする前にやつておかねばならないこと……、それはメールマガジンに記載してあつたアドレスへメールを送つてみることだった。

それを読んだ彼女はどんな反応を示すのか。まずはそれを確認してみたかった。

サヤカがお風呂に入っている間に僕はパソコンに向かってメールを書き始めた。当然、サヤカには秘密にしているので相当な罪悪感を感じている。しかし、現段階でサヤカに話すのは時期尚早というものだ。

全てがもう少しクリアになったら打ち明けてみようと思っている。

―― 株式会社Z御中 未下香子 様

―― メールマガジンが届いたのですが、登録した覚えがございません。

―― 当方のメールアドレスはどちらで知り得たのですか？

―― ご返答、よろしくお願いいたします。

―― 夏岡ヨシヤ

非常に無機質で要点不明瞭な文面となったが、これくらい殺風景にした方が相手に焦りをもたらすと考えた。

―― どんな返答が返ってくるのか楽しみだ。

これで、未下香子は正式に僕の名前とメールアドレスを入手したことになる。僕の方も自分の意志で未下香子にコンタクトしたことになり、つまりお互いがある一点で結ばれたような気がする。

明日、彼女の反応が楽しみだ。美人に対して何かを仕掛けるのは非常に心地よいのは僕だけではないはずだ。

サヤカがバスタオルを巻いてお風呂から上がる。

「暑い、暑い。少し沸かしすぎたかな」

僕はパソコンの電源を切った。

お風呂上がり直後は、誰でもノーメイクである。本当の美人かどうかはこの時、明らかになつてしまうのだ。

通常、美人もしくは顔立ちが整った人というのは、素顔に戻ると非常に幼い顔立ちをしている場合が多い。

化粧とのギャップが大きいからかもしれないが、幼く可愛い顔をしているのでハツとするところがあつた。

今この瞬間が真にそうであり、幼い素顔とバスタオルの奥にある胸やくびれたウエスト、きめ細やかな肌に見入つてしまう。

「僕も風呂に行くよ」

そう言つて部屋を出た。

しかし、先日夢で見た一对のタラコの夢と、そしてこの前電車で彼女が倒れ込んできたとき、僕の腕を掴んだこと。たったそれだけのことだが僕に、男としての何かを期待させる。

でも、そんな短絡的な欲望は決して実現するものではない。

ちよつと待てよ。僕は未下香子に何を期待しているのだ。冷静になった方がよさそうだ。

浴場に行き服を脱いで、正面にある鏡に自分を映した。僕も少し老け込み、肌のつやが無くなってきたように感じる。髪は薄くはなっていないが、だらしなく伸びてきた。

そんな男女の関係を期待なんかしていない。ただ最近、身近で起こる謎めいたことや未下香子、坂本晃三やカレに対する純粋な好奇心と、誰かに尾行されている、または監視されているような気配。

これらが全て一色単になり、僕に様々な期待と不安の入り交じった一種の興奮状態を感じさせているだけに過ぎないのだ。

湯船につきりながら考える。

美しい妻との生活に感謝しながら、明日の電車で未下香子に会えることに喜びを感じていることを。

さあ、彼女はどんな反応を示すのだろうか。僕から送信したメールへの返事も楽しみだ。

僕は浴槽から勢いよく立ち上がり、決心した。

「明日、僕の方から仕掛けてみよう」

続く